

NIE研究授業 実践報告

教員2年目の挑戦

増尾知之

長野市立三陽中学校

1. はじめに

はじめに、この度執筆させて頂く機会を頂きましたことをこの場を借りて御礼及び感謝申し上げます。教職課程センターの方々には学生当時大変お世話になり、お誘い頂いた田中保樹先生には現在に至るまで常々ご指導を頂き、卒業生としてこのように関わりがあることを大変嬉しく思います。ホームカミングデー2023の出席の際には多くの先輩先生方のご活躍を拝察し、大変刺激を受け、私自身教師としてもっと成長せねばならないと焦燥の念に駆られるばかりでありました。

今回卒業生寄稿のお話を頂きまして、まだ駆け出しの若輩ながら事例報告をさせて頂きます。本年度、巡りあわせて長野上水内理科研究委員に属し、またNIEの研究授業のお話を頂きましたので、そちらの研究授業について報告させて頂きます。お読み頂いた際には、様々な視点から御指導頂けると幸いです。

2. 本校NIE推進教育について

NIEとは、Newspaper in Educationの略で、学校などで新聞を教材として活用する活動のことを意味します。これまで、社会性豊かな青少年の育成や活字文化と民主主義社会の発展などを目的に掲げ、全国で展開されてきました。長野県においては、信濃毎日新聞社が長野県NIE研究会を設置し、主となって活動されています。

本校は、長野県におけるNIE指定校であり、今年度で2年目を迎えます。NIE研究授業の多くは国語科や社会科、総合的な学習の時間で扱われることが多いため、理科で実践を行うことは非常に珍しいそうです。教科に取り入れることに苦労があったことはもちろんのこと、子どもの新聞離れが謡われる現状においては、生徒に日頃から新聞に親しみを持たせる工夫も頭を悩ませるばかりでした。本報告では3点、全国大会について、朝学活での取り組み「NIEタイム」について、NIE研究授業についての実践を報告させて頂きます。

3. NIE全国大会について

令和6年8月1日(木)2日(金)に、第29回NIE全国大会京都大会が開かれ、長野県を代表し参加及び視察を行いました。大会のスローガンは「探究と対話を深めるNIE デジタル・多様性社会の学びに生かす」です。

1日目は、NIEの歴史と可能性について、4人の有識者の方々によるパネルディスカッションが行われました。新聞記事を探すことがNIEなのではなく、存在する記事から如何にして結論を導き出すかが重要である、と熱い議論が展開されていました。

2日目には、公開授業や分科会による各校の実践発表、ポスターセッションなどが行われました。私が参観した公開授業は、京都女子中学校の生徒が新聞記事の内容から福島第一原発事故への対応に対する問題提起を行い、福島県立安積高校の生徒と共に意見発信の共同宣言文を考える、というものでした。「私たち自身が考えていかなければならない」と課題意識を持った中学生たちがそれぞれの想いや願いを語り、自分ごととして捉える姿は大変印象的でした。「原発事故に関して福島民報では自分事として書かれていても、京都新聞をはじめとする他紙では事実のみあるいは全国的な視点でしか書かれていない」と、福島から遠く離れた地の中学生が真剣に考える姿には心惹かれるものがありました。

僣越ながら全国大会の様子を執筆し、信濃毎日新聞に掲載して頂きましたので、そちらも併せて報告とさせていただきます。(図1)



図1 全国大会の様子
(信濃毎日新聞令和6年9月7日掲載)

4. NIEタイムについて

NIEタイムとは、朝の時間やSHRなどの短い時間を利用して新聞スクラップや感想・要約の作成、発表などを行い、活字に親しみながら読む力や書く力を伸ばす活動のことで、全国大会で紹介されたこの取り組みを10月より本校2学年の朝学活の時間に取り入れてきました。

信濃毎日新聞社様より新聞記事をデータベースで扱うものも頂きましたので、生徒達はパソコン上で調べ、切り抜き、まとめることができました。朝学活の時間に毎日の当番が新聞記事の内容を紹介し、その感想を発表するこの活動は、生徒に時事問題を意識させるきっかけを与え、クラスへ自分の意見を発信、表現する機会を設けるという点で効果的な活動だったと考えます。(図2) 実際に、「新聞って意外と面白い」という感想をもったり、

新聞を一生懸命めくってどの記事にしようかと吟味したりする生徒の姿から、新聞への親しみを持つ生徒が増えたことを感じました。また、新聞を用いた公開授業を想定していた私にとっても、記事の見つけ方、スクラップの仕方を学び、新聞の面白さに気づいてくれたことは大きな成果でした。

今後は、活字に触れること自体が苦手な生徒もいることに留意し、楽しみながら活動を続けられるように工夫を重ね、時事問題へ関心を持つ生徒を増やしていきたいと思います。

5. NIE研究授業について

5-1 研究授業を行うにあたって

令和6年12月13日(金)の1校時、NIEの研究授業を公開しました。

公開単元は、単元3「天気とその変化」第3章大気の動きと日本の天気です。この単元を選んだ理由としては、新聞記事を授業で取り扱うにあたり、気象災害と結びつけることが生徒の新聞への興味をより引き立てると考えたからです。この第3章は、観察実験から何かを見出すことが難しく、生徒によっては知識の詰め込みのように感じてしまうことも多いのではないかと課題に感じていた単元でした。そこで、本来は章の最後に扱う気象災害の内容を単元冒頭に扱い、生徒が各々疑問に感じたことを出させて、単元を通して知りたことや解決したいことを明確にした上で、興味関心を持って主体的に単元学習に臨む姿を目指しました。

第1時において、新聞記事から長野県には過去甚大な気象災害が起きたことを事例として紹介し、「災害を引き起こした気象現象はどのようにして発生したのだろうか?」という問いを考える場面の設定、問題提起をしました。生徒は各々の疑問や予想を持ち、自分で見つけた気象災害や興味のある事例ごとグループに分かれ、その原因を新聞記事やインターネットで調べ、まとめる学習活動を取り入れました。(図3)

第2時では、調べ学習の続きと、発表に移りました。この段階では、生徒は災害を起こした気象現象を調べた上で分かった気になっており、自分のグループの発表が待ち遠しい様子でした。しかし、実際にはなんとなく分かった気だけで原因について深くは理解しないまままとめている内容が多いため、そのギャップを公開本時で狙います。この段階で発表原稿をA4に印刷し、本時の準備を整えました。



図2 NIEタイム生徒作成資料の様子



図3 新聞記事で調べ学習を行う生徒の様子

以下、単元計画を示します。

単元の指導計画（9時間扱い）

※ 評価の観点 ①知識・技能 ②思考・判断・表現 ③主体的に学習に取り組む態度

○指導に生かす評価 ◎指導に生かすとともに総括としても生かす評価

時	学習活動	評価規準	評価の観点			評価方法
			①	②	③	
1 ～ 3 (本時)	過去の長野県の気象災害の事例から、災害を引き起こした気象現象はどのようにして発生したのかに疑問を持ち、新聞データベース記事からその原因を気象要素に着目して追究して調べ、発表を行う。 各グループの発表を聞いて日本の気象についてまだまだ知らないことがあることに気づき、単元を通して解決したい学習問題を立てる。	長野県で起きた気象災害に興味を持ち、災害を引き起こした気象現象はどのようにして発生したのか調べ学習を行い、気象要素に着目して考察し、発表することが出来ている。 様々な気象現象による被害が日本の気候によって起きると気づき、単元を通して明らかになりたい疑問を立て、日本の気象の特徴について見通しをもって主体的に追究しようとしている。		○	◎	発表原稿資料 学習カード
4 ～ 6 (単元内自由進度学習)	前時で立てた課題を解決するために、教科書、新聞記事、クロームブック等を用いて調べ学習を行い、日本の気象についてまとめ、理解を深める。	天気図や気象衛星画像などの資料とともに、自ら立てた課題を解決するために必要な情報を調べ、まとめることができている。			◎	学習カード
7	単元内自由進度学習で調べた内容を共有し、日本の気象についてまとめ、理解を深める。	日本の気象について自分なりにまとめることができ、理解を深めている。	◎	○		学習カード
8	数日間の天気図などから天気の変化を読み取り、科学的な推論に基づき翌日の天気を予想する。	天気の変化の予測について、目的意識をもって話し合い、科学的な根拠に基づいて自分の予想を立てることが出来る。		○	◎	学習カード
9	単元を貫く学習問題を振り返り、日本の天候と気象現象がもたらす災害とめぐみについて理解を深める。	単元を貫く学習問題に対する答えを見出し、気象現象によっておこる災害とめぐみについてまとめ、理解を深める。		◎	○	学習カード レポート

5-2 本時での生徒の様子

公開授業本時の主眼は、「これまで気象要素や雲のでき方を学習し、長野県には気象によるいろいろな被害があることを知った生徒が、災害を引き起こした気象現象はどのようにして発生したのかを考える場面で、新聞記事の記述から要因を探したり分析したりすることで、日本の気象についてまだまだ知らないことがあることに気づき、単元を通して明らかにしたい疑問を立て、日本の気象の特徴について見通しをもって主体的に追及しようとしている。」です。

授業前半では各グループの発表を行い、生徒は聞いた内容をメモすると共に疑問に思ったことを学習カードに記録しました。発表したグループは、気象現象が最も説明されているスライドを1枚、カレンダーに貼り原因を一言で示していきます。全グループ発表が終わった後では、発表内容のすべてが理解できたのかどうか、生徒からはいくつも疑問が生じました。(図4)

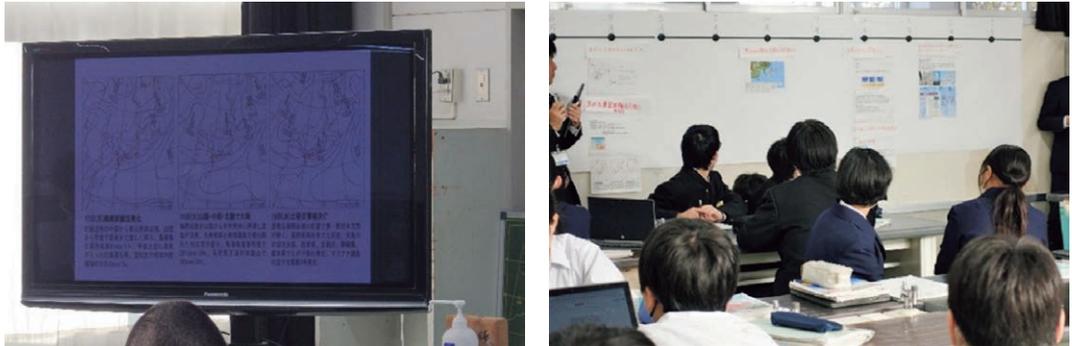


図4 授業の様子

台風、梅雨前線による大雨、降雪など、グループごと様々な気象現象について発表されましたが、発表後、生徒たちからは「西高東低の気圧配置って何?」「梅雨前線はどうやって発達したの?」「台風はどこから来るの?」といった疑問が出てきました。全体発表の場でその疑問を扱いましたが、当の発表グループも正確に答えることは出来ず、より追究するためにまだまだ気象について知りたい、という前向きな姿勢が教室全体で見られました。また、それぞれの発表原稿をカレンダーに示した際にも「夏と冬には気象災害が多い」と気づく生徒が見られ、「なぜ多くなるのか」ということに疑問をもつ生徒がいました。

発表を聞いて分かったことがある反面、意外と分かっていないことがあることに気づいた生徒たちは、「日本周辺の気象にはどのような特徴があるのだろうか」という単元を貫く学習問題のもと、今後の学習の見通しを持つこととなりました。(図5)

授業終末では、この単元を貫く問いを今後自分たちで解決していくにあたり、単元学習において自分が絶対解決したい疑問を一文書き示しました。

また、「これから3時間自由に使っていいから、今日出た疑問を全部解決しよう」と投げかけ、これから3時間の自由進捗学習での学習の計画を各自で立てました。全員が自分の疑問を明確にし、今後の学習に見通しを持ち、意欲的に単元学習に臨もうとする姿勢が見られた瞬間でありました。

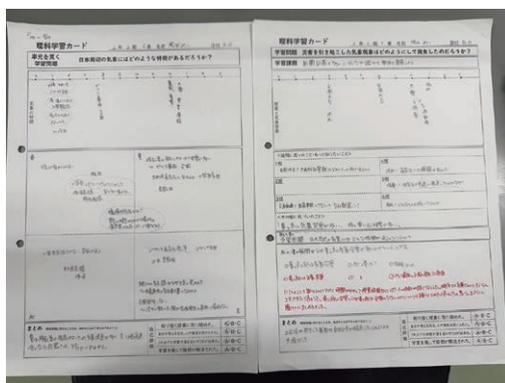


図5 学習カードより

5-3 成果と反省

本時において振り返ると、新聞に記事に興味を持って調べ学習をしたことに始まり、生徒が「もっと調べてみたい」という気持ちをもって授業を終え、次時に向かうことができたことは大きな収穫でした。ただ、疑問を生じさせる時、より四季の特徴に視点を向けることができれば、日本周辺の気象について考察の視点が向いたと思われます。手立てとしてカレンダー形式に掲示したのですが、まだ工夫の余地はあったのではないかと振り返ります。

その後の展開では、作成した学習計画に沿って各自調べ学習を行い、発表原稿を作成していきました。その際、毎授業の振り返りで「今日分かったこと、分からなかったこと、次回明らかにしたいこと」を記述し、私の方で次に向けてのアドバイスを書くことを続けました。自分の疑問を解決しながら教科書の内容も抑えさせる工夫が難しいところでした。

各自が持っている疑問を解決するための調べ学習を終え、個人で作成した原稿をもとに、互いに発表し合います。その調べた内容もカレンダーに追加しました。(図6)全員の発表が終わった後では、カレンダーはより一層充実したものとなり、四季ごとの気象の特徴も一元的に分かるものとなりました。



図6 作成後の気象カレンダー

単元終末の生徒の感想からは、「自分の疑問が解決出来て良かった」「他の人の発表が分かりやすかったし、聞いたことで日本についてより理解が深まった」など、充実した学習となった様子が多く伺えました。最後には、私の方で短時間、教科書的な知識の補充を行い、単元を終えました。(図7)

今回は、本来知識として与えて終わってしまう部分を子どもが練り出して生み出した間をもとに学習を進めるような仕組みを作ることを試み、子どもと共に考えていきました。この探究の過程が今後の探究学習の深まりになればと願うばかりです。

6. 今後の展望

今や新聞でなくとも様々な情報機器から情報を得られる時代になり、研究授業であえて新聞を活用することによりかなり苦労が強いられました。私自身も新聞を読むことが少なかったため、取り組む前には「どうせ新聞なんか使ったって・・・。」と前向きには考えられませんでした。

しかし、実際に新聞を手に取り、興味津々に内容を精読する生徒の姿を見て、新聞には探究的な学びを深める動機づけとして大きな可能性があることを感じました。子どもの新聞離れと誂われる現状もありますが、今ではデータ上で新聞記事も扱うことが出来ます。新聞の利点を存分に活かし、これからも研究・実践を重ね、新聞が教育により位置づき、生徒が探究的な学びを深めていくための一助となれば幸いです。

7. おわりに

私は現在、2学年の学級担当、部活動顧問、生徒会顧問、長野市理科研究委員の所属など、多忙極める生活を送っております。学生の頃憧れていた教職ではありますが、実際に働いてみると楽しい部分もつらい部分も多々あります。特に、「そんなことに時間を割かなきゃならんのか・・・。」と思ってしまうような事案が多く、なんとか効率良く、質を向上させながら日々の業務をこなせないかなあと考えるばかりです。ただ、授業を通して子どもが新たな視点に気づいたり、出来ないことが出来るようになっていったりしていく姿を見ると、自分のやってきたことは少なからず間違いではなかったのかな、と嬉しさに満たされる気持ちになることもあります。そのための教材研究は欠かせないし、日々の子どもの関わりで実態把握に努めなければならないと改めて感じます。本実戦で学んだことは「新聞で学ぶこと」で、それを通して「新聞以外にも身近なところに教材となるものがあるかもしれない」ということを念頭に、視野を広くしていきたいと思えます。

2年目の私の現在の目標は「理科教育を通して環境教育を推進し、学校教育の中で環境問題解決に携わり、学校を地域の「知の拠点」として確立させ、環境問題及び教科理科の専門家となる」ことです。今年度は経済産業省環境エネルギー庁主催の「政策提言型パブリックディベート大会」に生徒5人と参加し、全国7位という結果を得ることができました。また、教職員向けのエネルギー施設視察研修（2泊3日 福井県にて）や、とやまエネルギー環境教育授業研究会（富山県にて）に参加させて頂くなど、目標達成に向けて何

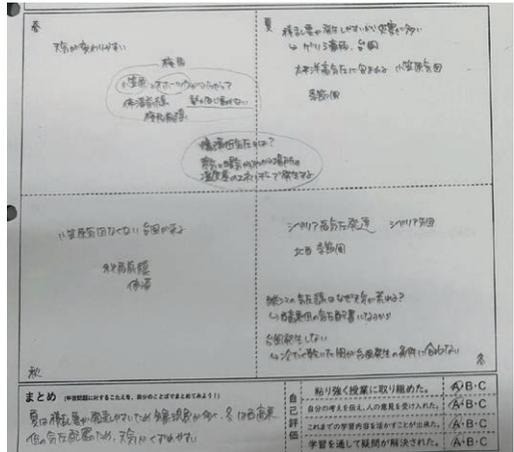


図7 生徒の学習カードより

かやってみようと行動に移してんでいます。それらが効果あるかどうかは、今後の自分に期待したいと思います。

ここまでお読み頂きありがとうございます。私が現在このように教員として活動出来ているのは、これまで支えた下さった方々のおかげであると心より感じております。関わってくださった皆様に感謝を申し上げますと共に、今後、本記事をお読みになられた皆様とどこかで教育についての未来を語ることを願ひまして、私の事例報告を終えさせていただきます。ありがとうございました。

参考文献

- 1 <https://nie.jp/> NIE 教育に新聞を